熊倉純子先生に聞く

谷中のおかっては、東京藝術大学の熊倉純子研究室の学生と地域のボランティアたちの活動から始まった。「ぐるヤミ」のプロジェクトディレクター・富塚絵美（ちょり）の研究生時代と「谷中妄想ツァー!!」の誕生を知る熊倉先生に、「ぐるヤミ」のアートプロジェクトの特徴についてうかがった。［文：小林英治］

藝大では主にアートマネジメントを専門に、自分が作品を作るのではなく、みんなが参加できるような場を作る専門家を育てています。ただ、ちょりは美術学部の先端芸術表現科を出ているので、もともとアーティストで、ちょっと私のところを目指してくる学生としては異色のタイプでした。作品を作っていた人物が、「藝大で美術を学んだ子たちが、世の中とのつきあいかたを知らないままポンと社会に出て悩んでいる」という危機感を持っていたらしいんです。研究室では「art-Link 上野-谷中」のお手伝いなどもしていましたが、もっと主体的にイベントやプロジェクトをやろうとした頃に、彼女の修了制作でやりたいことがまとまってきて、修士論文のための企画として、「谷中妄想ツァー!!」が出てきました。

とにかくちょりは「アーティストは呼ばない」と主張していていました。周辺にいる若いアーティストの卵を“芸術っ子”と呼んで、谷中のまちの独特の雰囲気からインスピレーションを受けて“ぐるぐる”したものを、仕事や作品というカタチではなくて、パッと自由に表現して、目の前にお客さんが来る環境にして、直接対話をしながら何かをして欲しいと。ただ、それは後からわかったことで、私は途中から、「ちょりはもともとアーティストなんだし、こうやるんだと教えたってそのやり方は身につかない」と思って、むしろ通常のやり方ではない方法を試みた方がいいと思って、蓋を開けてみたら面白いものになりました。

「ツァー!!」をつくるときにちょりから出てきた「妄想」は良いタームだなと思いました。言葉自体はちょっとマイナスイメージで、暗い深みに引きずりこむような制御不能なパワーがある感じですが、本当は人間なら誰でも持っていて、それを封印していないと社会人でいられないような、でも実は生きていくのに大事なもの。それをアーティストたちの力で一瞬引き出して、頭のなかに今見ている現実とは違う現実、一つの妄想の世界を味わっているような気分にさせる。実際に「ツァー!!」に参加するといろいろものをもらうんですよ。それが嬉しくて、「ツァー!!」の間は宝物のように思うんだけど、家に帰ってみたら、本当に木の葉だったり石ころだったり（笑）。狸や狐に化かされたような、そういう種類の妄想なんですね。

研究室で関わっているアートプロジェクトのなかでも、千住でやっているのはアーティストを呼んでくる地域型プロジェクトのオーソドックスな形ですが、谷中は何を大事に思っているのか、普通の人と感覚的にかなりズレている若い表現したい人たちの感覚をすごく大事にしていると思います。でも、去年はちょりたちのチームに千住の方に来て手伝ってもらったことがあって、それはすごく良いものになりました。彼女たちのスキームが谷中以外でも通用するということが証明できて、少し成長したかなと思っています。

「ぐるヤミ」の周辺②

谷中妄想ツァー!! 座談会

2010年11月に2日間にわたって開催された「谷中妄想ツァー!! 茶会（以下ツァー!!）」は、参加者によってルートや立ち寄る地点が異なり、誰ひとりその全貌を知ることができないという特徴があった。ツァー!!の各地点では何が起こっていたのか。およそ3カ月後に実施された座談会で、パフォーマーとして参加した“芸術っ子”やスタッフとともに当日を振り返った。

［聞き手：谷中のおかってメンバー（笠原・ちょり・大西・渡邉・ポーリー）］

※文中の肩書・学年は当時のものです。

【Part.1】2011年2月11日（金）

無責任だけど、狙いはある

安積（あさか）知里　東京藝術大学美術学部先端芸術表現科2年　パフォーマーとして参加

笠原　初年度も参加してくれた安積さんは、今年はどんなパフォーマンスをやりましたか？

安積　いま一番話しやすい友人を呼んで、女子高生の格好で、友人が好きなマイケル・ジャクソンの『スムース・クリミナル』の練習を2人でしているというものです。途中で練習やめて休憩し始めたりとかして、それも含めてパフォーマンスです。多分、パフォーマンスだということは皆さんもわかっているんですけど、例えばタバコを吸っていると「だめじゃーん」ってお客さんが怒るから、そこから逆に会話をする流れができたりしました。

ちょり　2人だった1日目より、1人だった2日目の方がクオリティが高かったという評判でした。

安積　2日目は友達がいなかったので、私が1人でずっと練習できたんです。ツァー!!はお客さんが積極的というか、必死で何かを探そうとしているみたいなところが印象的でした。初めて参加した去年よりは、何をやっているのか自分自身でもクリアになっていたけど、まだ個人的というか……自分の中に吸収して終わっているところがありました。

ちょり　ツァー!!って、ある意味ですごい放棄の仕方をするじゃない。企画も出さないし、当日何してるかも知らない。主催するこっちもすごく無責任というか。

安積　無責任って言うけれど、狙いがあるなとは理解しています。私も今回は、「あ、これが谷中で求められていたものかな」と感じる瞬間があって、そういうことを狙って、これだけ大きいツァー!!を組むのはすごいことだなと思います。

大西　狙いという面では、初年度にやってもらって、今年はどういうふうに関わってくれるかを期待して依頼した部分もあったんだよね。

スタッフのリミッターを外した「ネジ巻き」

江淵未帆　アクセサリー作家　スタッフ章（ネジ巻き）の制作で参加

ちょり　江淵さんは取手でネジを売っていて、私の個人的な欲求であの人呼ぼうよ、あのネジ欲しいよって誘いました。「とりあえずネジいっぱい作ってくれますか？」とお願いしたので、関わり方が他の人と全然違う。「ネジ巻き」は当日スタッフが皆で腰につけたんですけど、人間にネジがついてることが怖かったみたいで、近づけなかった子どももいました。

江淵　発注を受けて特急で作る感じで、私も全然どうなるかわからなかったです。当日は参加はしていなくて、様子を覗いただけですけど、良い場所で良い感じに使ってくれたのがすごく嬉しかったですね。

笠原　ネジを考えたきっかけは？

江淵　クラシックのコンサートで、一緒に紙芝居をやることがあったんです。ヴァイオリンとヴィオラの人がエレガントな格好してたんですけど、そこにネジをくっつけてみたんですよ。演奏自体はとても技巧的でレベルの高い人だったんですけど、ネジがついているとちょっとかわいく見えたんですよね。そのあと、取手のアートバザールで、売れても売れなくても見た目が華やかになるかなと、子どもにつけさせたりとかして遊んでいたら、それをちょりさんに発見してもらったんです。でも私としては作家性とは別のパロディーものなので、気は楽でした。自分との葛藤みたいなのはなくて、早く作らなきゃみたいなことばかり考えていて、結果的にとても楽しかったです。

ちょり　スタッフの中でも、帰りもネジを付けたまま電車に乗っていったみたいで。熊倉先生も「こんなにこのネジが生かされた現場は初めて見ました」って。あれをスタッフ章代わりに使ったことで、マネジメントの仕方的にも通常とは違うものになったと思ってます。

笠原　リミッターが一つ外れたみたいな（笑）。

大西　ネジのことだけで一つ機能してたよね。

江淵　今日こうやって話す「まとめ会」も良いなと思っていて、普段商品的なものを作ったり、工場で働いていたり、幅が狭いので、広がりがありますよね。私はアートとそうじゃない商品の間を行ったり来たりしたいので、こういう時間が必要だと感じました。

せめぎあいの場、最終地点

豊永恭子　東京藝術大学美術学部彫刻科修士1年　最終地点の空間デザインを担当

笠原　最終地点の公園では、「みんもぐ」というグループが、お皿とフォークとスプーンのプリントをした布を広げて、パーティみたいにして、おもてなししました。

豊永　ドレスアップした前掛けのような服を、洗濯物みたいにバーッて出しておいて、それを着てもらいました。

笠原　遠くから見るとお祭りみたいな感じで、白だから光が当たると映えていましたよね。

豊永　最初の仕込みに来てくれた8人くらいで、朝から、あっち引っ張って、こっち引っ張って、ああ違ったってしながら、お客さんが帰ってきてもまだこそこそ作りながら、終わる時にちょうどできあがるみたいな感じでした。

笠原　テントを張ったり、提灯をいっぱい作ってくれて、カラフルですごく良かったです。1日目はじんじんさんの野点とのバランスをどうとるか、当日やりながら決めていったから、申し訳なかったです。

豊永　野点の解放感に対して、テントをあまり広げると邪魔になる位置関係でしたからね。

ちょり　ツァー!!では、作品を見たことないけどきっと良いはずだ、あの人は何かやってくれるだろうということだけで呼んでいる人が多くて、最終地点にはそういう人が集まってせめぎあう。どんどん力の強い人が勝っていく場所取りみたいな感じになっていった。

豊永　彫刻って個人プレーなところがあって、普段はお互い意識はしているけども、「あいつはああいうやつだし」みたいに、あまり深くやり取りしないので、同じ年代で似たようなことで悩みながらやっている人たちと喋れるのは楽しいし、それによって自分も客観的に見られる部分がありました。人の意見を聞けるし、自分の考えもどうやって出していったら良いかがわかるようになった。

ちょり　恭子は今回をきっかけに、結構はっちに来ている。ぐるぐるミックスにもずっと関わってくれているしね。

豊永　ほんとに思いもよらない出会いが多すぎて、楽しいです。日々、何もなくても、はっちに来たら何か楽しい気がする。

鮮度の良いうちに出す「寿司型産業」

がくとうえポン（中野岳　東京藝術大学美術学部彫刻科4年／上田啓太　東京藝術大学美術学部彫刻科4年）　パフォーマーとして参加

笠原　人づてに聞いた話だと、変な雑貨がたくさんある美容室「イトウビューティーサロン」での2日目はそのお店の奥さんとがくさんが絡んでいたそうですけど。

中野　うえポンがスーツでサックスを吹いて、僕は奥さんに合わせてちょっとオールドスクールな感じの格好で、奥さんが昔初恋をしていた過去のじいさんという設定。最初は奥さんには俺が見えてないんだけど、ふとした瞬間に気づいて……。

上田　「鏡の中の人と出会う」というタイトルで、最初観客は僕たちのことが見えてない。観客は席に座った状態で、僕らはその後ろでパフォーマンスしていて、鏡越しにしか見えないようになっている。だから一度もリアルな僕たちに会ってないんです。

ちょり　やってるらしい、見れるらしい、もらえるらしいよ、みたいな噂が他の場所に流れてくるのが面白かった。

渡邉　普段の奥さんを知っている人にとっては、「ええ！？　あの奥さんが踊ったんだ！」という驚きで（笑）。

中野　事前には出る順番くらいしか決めないで、あとは全部奥さんのアドリブ。でもなんか、自然と良い顔をするんですよね。

笠原　へー、それは私も見たかったなぁ。

大西　2人はフットワークが軽くて、またどこかへ移動していく途中で谷中にいるみたいな印象があります。だから考えたことをすぐに表現するような。

上田　つい昨日できた「寿司型産業」という言葉があって、鮮度の良いうちに食う。できたらいいなというレベルですけどね。

中野　去年のツァー!!でやったおみくじを配るパフォーマンスは発展させて、場所によってちょっと変えてやったりして、秋田にも行きました。言葉としては共同作業だとか地域密着型みたいに言えるんですけど、それは建前であって、だんだんつまらなくなっていって、今はちょっとやめてます。

笠原　やっぱり鮮度が重要。

上田　ツァー!!は考えるスタート地点が全然違うところから出ているんで、普通では思い浮かばないことができる。たとえば「場所」は大きいですね。

笠原　イトウビューティーサロンってすごいですよね、あの奥さんの趣味というか。

中野　今回のは一応、「シネマビューティーサロン」という作品にして、映像で完結させる予定です。

ちょり　見ている人は動けなくて、すごい孤独感のなか向き合っているから、変に体験が大事になりすぎてしまう。あと、多分カメラが近くで回っていたことで、結構緊張感が走っていたからね。

江淵　それも含めて、あの場で起きたこと全体を映像で見ると面白いですよね。

「妄想」に引っかかってくるお客さん

菊間優　東京藝術大学美術学部芸術学科3年　マップ描きとして参加

菊間　私は次の地点へのルートを教えるマップ描きをしていました。配置された場所では、パフォーマーの猪木さんが白衣を着てマッドサイエンティストみたいな格好をして、豚の脂肪を加工して人の手の形にした作品を「筆をつくる店」という画材屋さんの中に置いてお客さんがぎょっとするというものが行われていました。猪木さんはもともと解剖学の方で、手にすごく関心を持たれていて、普段から豚の脂肪を使って人体の部分を作るという制作をされているらしくて。普通に筆を買いにきたお客さんからは、「え、何やってるの？」ってぎょっとされたりして、一切喋らないつもりだったらしいんですけど、話しかけられたら流れで普通に応対していました（笑）。

豊永　筆を買いに来たのに豚の脂肪があったらそりゃ驚くよね。

菊間　お店の方もすごく親切でした。2日目は、お店のご主人が筆を作るのに使う毛を分けてくださって、それと割り箸とビニールテープを使って、お客さんに毛先も整えていない「書けない筆」を作ってもらい、何かを書いて、持ち帰ってもらいました。安積さんから、「お客さんが積極的」という話がありましたけど、こちらが何もしなくてもグイグイ来て、自分なりに「こういうことね」と解決してスタスタと行っちゃう人もいましたね。私は参加してる間もお客さん目線で見ていたんですけど、このツァー!!に来るお客さんは、どういうきっかけで来るんでしょうか？

ちょり　私たちもそこは割と読めない部分があって。1年目に面白かったのが、拠点にしていたクマイ商店に、1カ月前から手書きで「妄想ツァー!! あります」って、「かき氷あります」みたいに貼っていたんだけど、それだけで「この妄想ツァー!!って何ですか？」と聞かれて徐々にそれで予約が埋まっていったんです。この殴り書きが実は一番力があるんじゃないって（笑）。今年はポスターやチラシもしっかり作って、美術館とかに結構置いたんですけど、多分そこからじゃなくて直に来る人が多い。

大西　それがおもしろい。人伝えだよね。

ちょり　あと1年目のリピーターが多かった。ある意味何も期待してないお客さんがいて、何見ても勝手に解釈して勝手に喜んで帰ったり。

大西　子ども連れで来た人が今年は多かったかな。散歩とかで谷中に来たいんだけど、どうせならイベントで楽しみたいというのも聞いた。

笠原　今後、ツァー!!をどうやるかは……。

ちょり　毎回ゼロから考えるしかできないから。

笠原　寿司型産業で、その時に新鮮なものを。

ちょり　その場その時に縁があって近くにいた人と思いついたら何かしようっていう感じかな。

【Part. 2】2011年2月12日（土）

自分の思い通りにならない作品をつくる

西尾千尋　東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科助手　パフォーマーとして参加

笠原　西尾さんの担当地点は、てんぎょうさんの先輩の森田さんの家。指物職人のお父さんが亡くなって、ずっと残っていたところです。

西尾　障子の向こうは普通に住宅だから、森田さんは向こうで普通に寝てました。築50年くらいだと思うんだけど、元は指物職人の家だからいっぱい木があって、ものすごい重さ。ここでは近所の人に写真を見せて、森田さん宅までの道を教えてもらう映像を流しながら、お客さんにここに来た道を思い出して話してもらっていました。それから床のテクスチャーがすごかったから、道を教え終わったら、床をフロッタージュして持ち帰ってもらいました。

笠原　西尾さんは学科の助手さんで、色々なサポートをしていただいていますが、個人的には西尾さんの活動を知るきっかけにもなりました。

西尾　普段とは大分違うかもしれないです。私は基本的に我が強くて、ガッチリ作品を作り上げてしまいたい方なのね。前年もお客さんとして来ていたけど、正直あんまり印象は良くなくて。だから今年誘われてちょっとしんどいかなと思っていたんだけど、自分の活動で我が強い

のもわかっていたから、自分が思い通りにならないことをやってみようと思って参加しました。そういう点では良かったと思うんだよね。なるべくまとめないで、何かはやるけど何にもならないみたいな感じにしようと思って、そういうことはできた。でも不思議な未消化感みたいなのはあるかな。その日限りで終わりにしているし、何かにつなげようとも思ってなかったし。でも確かに谷中だからゆるくできたというのはあります。場所を借りている森田さんに気を遣うことのウェイトが大きかったけど、それはそれで楽しかった。今日は森田さん元気かなー?みたいな（笑）。

笠原　この前通ったら、「森田」って表札が出ていました。今まで出してなかったのに。

西尾　気持ちが変わったのかな。もしかして、谷中の人が自分の家を知らないってことに気がついたのかも（笑）。

笠原　最終地点はどう感じましたか。

西尾　ツァー!!の全体図がよく見えないことは面白いと思うけれど、例えば最終地点に行ってお客さんと話してくださいと言われても、自分の立場がよくわからないんだよね。もともと多数対多数で混ざっているような感じがすごく苦手で、パーティーで孤独になってしまう人みたいになっていたかもしれない。面白かったけど、個人的には自分がどこにいていいのかわからない感じはあったかな。

笠原　そこは難しいですね。私も最終地点はどうしようかは悩んでいて、1日目は本当にぐちゃぐちゃだったんですけど、2日目はもう少しまとめました。その人たちがどういう心境かまでは考えられなかった部分もあります。

いつもの展示からパフォーマンスへ

潘（ハン） 逸舟（イシュウ）　東京藝術大学美術学部先端芸術表現科修士1年　パフォーマーとして参加

潘　僕が作った「尖閣諸島が沈む」という映像作品を皆に見せて、それで、ピータンをあげようかなと。それだけなんですけど。あとお酒もあって。

渡邉　皆気持ち良くなって（笑）。

潘　お酒を飲みたい人は飲んでくださいという。コンセプト的には「忘れましょう」。そういう問題はおいといてみたいな……かな、多分。

徳本　ピータンを持って帰ったら、母親に「誰にもらったの!?」「知らない人にピータンもらったの?」って（笑）。その時は自然に「あ、もらった」みたいな感じでしたけど。

笠原　もらった時はテンション上がっていたけど家へ帰ったらなんだこりゃ!? みたいなことは他の地点でもあったみたいです。潘さんがそもそもツァー!!に参加した経緯は。

潘　2週間ぐらい前に大西さんから誘われました。チラシをもらった瞬間、いつもの発表の場、展覧会とは違うと感じました。普通の展覧会に対して僕は肯定的で、それはそれで意味があることなんだけど、でも例えば相澤さんという人と出会って、その家を借りてやるなら、なにか違うんだろうなって。うまくできたかはわからないんですけどね。

大西　最初に何も知らせずに、いきなり相澤さんの家に連れて行ったんだよね。

潘　そう、その時は何をやるかも決まっていなかったんです。そこで、相澤さんのお父さんが戦争中に中国にいて、戦後もすぐ帰れなくて1年くらい暮らしていたという話を聞いたんですが、ちょうど僕が尖閣諸島の映像を学校の発表で作った時期だったんです。それから2回くらい会って、ご飯も食べて、私はこれを見せたいと映像を見せて、それからトントントンという感じで進みました。最後にピータンを渡したのは、この卵を握った手のサイズと、土に3カ月くらい埋まっていた卵というのがなんか良いかなと思って。展示で見せるなら映像ひとつで成立するけど、相澤さんの家という場所でやること、しかも僕のところには5組くらい限定で、そして20分という時間がかかるから、ちょっとパフォーマンスに近い。

大西　ツァー!!の場合、それぞれの場所との出会い方、入り込み方も違う。とくに潘にやってもらった相澤さんはかなりおつきあいも長い人だから、場所の深さみたいなのはありましたね。

放たれた場所で、関係をつくっていく

徳本彩花　武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科4年　パフォーマーとして参加

笠原　徳本さんの地点は、「初音の道」という、谷中の背骨のような道の入り口のメキシコ雑貨屋さん。

徳本　私がバイトしているカヤバ珈琲の豆で珈琲染めしたお守り袋と、何も描いてないカード、谷中辺りで出会った面白い人のイラストを描いたシール、折り紙を置いておきました。来た人に、「大切な人へのカードを作ってください」みたいな感じで、表面にはシールを貼ったりコラージュしてもらって、裏面には大切な人へのメッセージを書いてもらいました。私のイラストと来た人のオリジナルが合わさったら面白いと思って。お守り袋にそのカードとコーヒー豆を入れて、お願いごとをしてもらって、持って帰って今日のお土産話を大切な人にしてもらう。1日目は自由な感じにしたら人が集中しちゃったので、2日目は工夫してもうちょっとすっきりさせました。

笠原　ここのポイントはお客さんが20分くらいいましたよね。他のところは5分、10分くらいだったんですけど。

徳本　受け身な方が多いかなと思って、一緒になってできるものを考えました。夫婦で来てくださった方とか、お互いにカードを作り合ったり、そういうほのぼのした感じになりました。

笠原　お店の雰囲気と合っていた感じがします。お店の人も楽しかったみたい。

徳本　お店の人とは、この後も道で会ったりとかして、普通に仲良くなりました。お客さんがいっぱい来てご迷惑かなと思ったんですけど、1日目に一緒にご飯に行って、どうすればうまくいくか、どうしようかねと考えてくれたりとかして、すごく良い人でした。

笠原　ポイント地点でのパフォーマンスをお願いした徳本さん、西尾さん、潘さんは、そこのご主人と私たちが知らないところで交流が生まれていたみたいですね。私たちはある意味で出演者となるパフォーマーを場所に放っただけなのに、色々面白い展開をお客さんに見せられたなと思います。これからのツァー!!でもそういう部分は残していきたいです。

不審者への反応を実感してみた

山田哲士　東京大学文学部哲学科4年　路上パフォーマーとして参加

ちょり　山田くんがツァー!!に参加するきっかけは?

山田　大西さんに声をかけられて、「僕もパフォーマーです」と自己紹介したら「見ればわかります」って言われて（笑）。「じゃあ来週やってみてください」といきなり決まりました。地点の人と違って、路上でやる人はエリアが全体になるから、パフォーマーかそうじゃないかわからないことが一番面白そうに思ったので、パフォーマンスとしてなら許されるようなことをやろうと思いました。それで、とりあえず変な格好をして……。

渡邉　スウェットみたいな服を着て。眉毛もなくて。

山田　それでサンダルでテケテケ歩き回っては止まる、という感じのことをやりました。出演者の方に「この人どうなんだろう?」と思われたら面白いかなと思ってやったので、ゴール地点の僕の姿が凄く怪しくて、大西さんが僕のことを

本当の不審者だと思ったらしく、それで成功したなって思いました。

笠原　私も全然わからなかったです。隣の交番の人に呼び止められてましたよね。

山田　最初はゴール地点近くにいたんですけど、後半になったら皆が集合するから交番の方でと言われていたんです。それで隠しておいた別の衣装に着替えて、交番の前で奇行を繰り返していたんですね。その映像を撮ることを友達に頼んでいたので、パフォーマンス的に映ったりもするし、たまたまビデオを持っている人が変な人を撮っているように思われたりもした。「これYouTubeに上げる気だろ」と言われているシーンとか、一連のやり取りがハプニング的に面白くできたし、非常にエキサイティングでした。映像作品として編集するつもりです。この辺の人たちはみんな理解あるからと言われていたので、そこを生かしてやろうと思っていて、実際に注意もされたけど、すごく理解があると感じました。

笠原　あとで一応、交番の方に声をかけたら、「あの人は本当に大丈夫かな？　救急車とか呼ばなくて平気かな？」って（笑）。本当に凄い具合が悪いんじゃないかと思っていたみたい。

山田　本当にそういう人になりきろうとしていたので、してやったりですね（笑）。楽しかったです。

新庄　その警察の人も山田さんが哲学をやっている人だとは思いもしないですよね。

山田　あえてそこら辺の倫理的な問いを自分の中でたてたところはあるんですけどね。そういうものに対する世間の目がどういうものか、自分で実際に体感したいっていうのがあって。悪意のあるような言葉をかけてきた通行人もいて、ああ、そういうふうに映ってるのかなとか。もちろん確かに僕が悪いですけど、実際にそういう気持ちになれたというか、そういう機会って普段ないですからね。

移動し、出会って、変化していく

新庄恵依　東京藝術大学音楽環境創造科1年　路上パフォーマーとして参加

新庄　私も、一般人なのかパフォーマーなのか微妙なきわどいところをいこうと思って、私服で行ったんです。谷中霊園あたりの人通りの多くないところで、基本的に一人で踊っていたり、公衆電話ボックスに入って動いたりしていました。たまに道とか聞かれて、踊りながら答えたりして。一般の通行人から見たら変な人。でもツァー!!の人から見たらそこまで変じゃない人。

ポーリー　「何をしているかわからない」を、かなり極めようとしたってことでしょ。スタッフのネジも付けてなくて。取材で撮られた写真ですら、ツァー!!に来たお客さんが踊ってるみたいにも見えるし、すごいなって思った（笑）。

新庄　その中で、変化してくことを想定内にしながら、どう変化してくのかはその日に任せようと思っていました。私は最初、無音で踊っていたんですが、音楽演奏しながら歩いている人たちがたまたま通りかかって、目が合ったから中盤はついていって、その音楽で踊りました。そうしたらさっき見ていた一般の人たちも、あ、やっぱりパフォーマーだったんだ、という感じで認識されて。それからまたブラブラして、最終地点までの桜並木で別の路上パフォーマーの人が椅子を使ったパフォーマンスをしていたんです。椅子を2つ置いて自分が1つに座り、もう1つには誰も座ってない状況が作ってあったので、そこに座ってみたんですね。相手は私が何なのかも知らないけど、普通に反応してくれて、普通の会話をしたんですね。

笠原　パフォーマンスをしながら。

新庄　その人はダンスに興味があるというので、ここで実践しようとなって、椅子に座ったまま、私の動きを彼女にマネてもらって、3分くらいやって彼女もダンスにトライしたりしていました。それも「今日も良い天気ですね」とか、どうでもいい話をしながらやって、だんだん人が群がってきて、何をやっているんだろうね？みたいな感じで去っていくということをしました。

渡邉　すごい、動きながらパフォーマンスが変化していったんだ。

新庄　3段階ですね。路上パフォーマーはどこにいてもいいので自由に動こうと思って、あまり下見もせず、その場所にあるものでどうにかなるかなと思っていました。割と思っていた通りに変わっていったと思います。

笠原　地点の人はお客さんが変わるからだんだん変わってくるけど、内容的には同じじゃないですか。でも路上の人はどんどん変わっていったんだ。

新庄　地点の人が結構がっちり作っていると聞いていたし、しかもお客さんはそこに行かなきゃいけない。だったら私は、うろちょろして自分も変わりながらという路線でいこうと思ってやりました。

大西　その段階があるのって、やりやすいですかね。ステージが与えられてそこで何かをするよりも、段階を踏める余地があることが。

新庄　やりやすいかどうかというよりも、路上パフォーマーは地点があるパフォーマーとは違う役割だと認識していて、どこでも行けるということは場所も環境も全然違うから、流動的にやろうというスタンスだったので、結果的に3段階違うものができたんですよ。自分で作るとしたら、もちろん色々作ります。でもツァー!!の特異性に合わせようとしてやったので、その中で自分が楽しもうと思いました。参加して思ったのは、ツァー!!のお客さんに、邪魔しようというか、ちょっかい出すみたいな嫌な感じのお客さんはいなかったですね。学科の別のプロジェクトではそういう話も聞いたので。

ポーリー　逆にもう妄想を期待して来てるから、お客さん側にとりあえず受け取らないとという心境があると思う。うちの親が潘さんのところで尖閣諸島の映像を見て、ピータンもらったという話は、何度も電話で言うし、それだけ強い印象を持ってお客さんは帰っているんですね。お客さんにもパフォーマーにも、自由に勘が巡らせる場所を作らないといけないと思っています。

大西　そういう演劇的なスクリーンみたいなもの、決まりみたいなことも、実はあることにしても良いし、ないことにしても良いし、そこも妄想していい。ある意味、妄想だから自由にしていいというのは、すごくいい加減。声かけるのも道ばたでちょっとみたいな感じで、ちゃんとした段取りが組まれていないけど、「妄想」で一応許してもらってる。でもそれによって、さっき仰ったような、自分とお客さんとの関係性をその場で作り替えていって、相手の反応に対しても自分が楽しむことでより可能性が膨らむなら、そっちの方が面白いんじゃないのということは、おかっても期待していることで。そこは山田さんに対しても思いました。

山田　普段は、音楽なのかパフォーマンスなのか、どこからが準備でどこからが本番か、どこからがノイズでどこからが音楽なのかわからないような即興音楽をやっています。音楽って何だろうとか、ノイズって何だろうとかそこに踏み込むようなもの。今回のようなパフォーマンスも、コンセプト的にやっぱり、どこまでがアートかとか、境界線の曖昧なものが間違ってる訳じゃないしというのは伝わって。そこはすごく面白かったし、楽しんで、だからこそできることをやろうとしていました。

笠原　タイトルは研究室の先輩が考えたんですけど、これにしてよかった。やりたいことの的を射ているネーミングですよね。ツァー!!って色んな人が集まるから、そこでまた色んなつながりができていく場としてもすごく良いと思うんで、是非またここにも遊びに来てください。

「ぐるヤミ」の周辺③

きむらとしろうじんじんインタビュー

基本的に著名人を呼ばない方針のぐるヤミに、唯一、大きく関わっているアーティスト・きむらとしろうじんじん。谷中のおかってのメンバーが、彼と共に「〈野点〉」や「ぐるぐるミックス」をつくり上げる中で学んだことは大きい。「野点原理主義者」から見る谷中のおかってとの共通項、そして今後の彼らに期待することは。

［聞き手：小林英治、猿田詠子］

囲い込みや名付けを回避しながら まっとうな大変さを引き受けること

――ぐるヤミに関わるようになったきっかけを教えてください。

じんじん　谷中のおかってのの方々と知り合ったのは、東京アートポイント計画ディレクターの森さんや熊倉先生に声をかけられたのが最初です。森さんはおそらく、彼らと活動を共にすることによって、僕と彼らとの関係に起こる化学反応みたいなことを期待されていたと思います。そのために、僕がやっている〈野点〉を彼らの拠点とする谷中エリアでやることに加え、もう一つ、彼らと一緒に別の新しいプロジェクトを立ち上げることになり、それが「ぐるぐるミックス」になりました。彼らを紹介された時に一緒にやろうと思ったのは、参考として見た「谷中妄想ツァー!!」の映像がすごくおもろかったから。まあ、今思い返すと、僕は路肩で何かをやっている人に対しては同業者として無条件でシンパシーを感じるもんで、ほんまにおもろい映像だったのかどうかは実は曖昧なんですが……（笑）。パフォーマーと呼んでいいのかどうかわからん人々のへんちくりんな行為が、境界線があるのかないのか分からん状態でまちやお客さんと接していて。不穏なのか、ノンキなのかもわからん感じで。妙に心に残っています。

――実際に一緒に活動してみてどうでしたか？

じんじん　何かに囲い込んだり名付けたりすることを回避しようとする姿勢に対する共感がありました。そこがよくあるアートプロジェクトやアートフェスと彼らとの違いで、「アート」と呼ばれる考え方やフレームに安易に囲い込むことによって取りこぼされる面白味を、彼らは感じ取っていると思います。昨今「アートプロジェクト」と呼ばれるものが盛んになって、一見、僕のやっている〈野点〉も路上に着地しやすい状況に見えますが、むしろ追いつめられているという感じもあるんですね。そうやってフレームを作って「摩擦係数」を減らしてあげないと、何も人と人との間に着地させられないなんて、ほんまおもろないし、息苦しい。そういったことを回避し、安易に名付けることに対して拒絶する感覚は、ぐるヤミの活動と共通しているものだと思います。

――やりやすければいいということではないと。

じんじん　例えば、よみせ通りで〈野点〉を実現するために行う地元の人たちとの交渉はとてもまっとうな大変さで、商店街の人に協力していただかないとできないことだし、応援してくれた方が商店街の中で立場がまずくなったらどうしようとか、心配事も増えますよね。でも、そうやってまちで何かをするときは、何かしら人々の情けにすがらずにはいられないんです。決して一人ではできないし、情けにすがらないでいいシステムを整備することには、僕は反対です。もし、やっている側が葛藤を感じなくてもよいための言い訳として「アート」が使われるなら、それはとてもツマラナイことだし、そんな理由にしちゃいけないんですよ。これまでに〈野点〉はいろいろな場所でやってきていますが、「誰に断ってやってるんじゃ！」とか、「わし若い人応援したいねん、がんばりや」といったように、とにかく路上で起こってる出来事に対して喜怒哀楽何であれ、感情が動いている人が多いまちの方がおもろいし、懐が深いんです。そういった僕が「人が暮らしてる限り、そりゃあるだろう」と思ってる摩擦係数が存在するときの方が、魅力や歓びを感じられるし、プロセスも結果も含む総体としての「ええ〈野点〉」ができるんです。

ぐるぐるミックスで彼らの妄想を 具体化するノウハウ＝作業を手渡す

――「〈野点〉」に続くプロジェクトとして「ぐるぐるミックス」を行ないました。

じんじん　「ぐるぐるミックス」を協働してつくりあげたことは、彼らと現在まで関係が続いている要因として大きいですね。ここ10数年、僕は〈野点〉と同時に京都では幼稚園の子ども造形教室の先生をやっているので、〈野点〉プラスアルファについて考えた時、まず思いついたのが幼稚園で何かできないかということでした。ぐるぐるミックスには、〈野点〉とは別の社会的価値があると思っています。今の小学校や幼稚園が、囲い込むことで「安全」を守ろうとする傾向が強いなかで、ミックスみたいな有象無象が出入りしつづける場所に子どもを通わせてくれる保護者の方たちも支援して下さる幼稚園初め地元の方々も大変なチャレンジをしていると思うし、それに応えつづける場であってほしいです。従来の枠を超えて複数の園や保育所から集まること、地域の子どもを一年間継続的に預かって無事にお返しすること。それだけでも大きな責任だし、大西がメインファシリテーターとして2年間続けてやってきたというのは立派なことです。もっともっと評価されていいと思いますね。〈野点〉とは別の、と言いましたが、「子ども」を「まちや路上」に置き換えて考えるなら〈野点〉やツァー!!がやってることはミックスがやってることと全く一緒のような気もしますね。

――京都の幼稚園で行なっていることと、「ぐるぐるミックス」の違いは何ですか？

じんじん　課題の内容や子どもたちとの遊び方に関しても、京都でやっていることとは違うことを東京で試したかったんです。例えば、子どもたちと野菜の絵を描く時「ほんまは八百屋のおっちゃんに一緒に居てほしいなぁ」と思っても、京都では幼稚園の枠内なので、なかなか難しい。ぐるぐるミックスでは地元の方々をゲストに招いて直接子どもたちとやりとりをしていただける、これはほんまに素晴らしいことです。そして、こんなことができるのは、おかってのミックス以外の活動あればこそでもあります。実際ゲストで交番のお巡りさんに来てもらえたのは、〈野点〉やツァー!!ですでにお世話になっていた関係性があったから。そこでアーティストと呼ばれる人にできることがあるとしたら、ゲストと子どもがどういう遊びをしたら楽しいか、それを一緒に発明したり、両者の間に立つような役割です。ぐるぐるミックスでも〈野点〉でも、おかってのメンバーに伝えたのは、とっても具体的な作業そのものだと思っています。お便りケースや手洗いやトイレや替えのパンツのこと、子どもと話す時の顔の位置、運動会テントの安全な組み立て方……、それは妄想を現実に着地させる時に一番重要なこと。具体的な作業こそが最も繊細で多様で、なおかつ越境性が高いと思っています。今後の彼らに期待することは、ミックスを倒れずに続けること、それから、路上にも出続けて欲しいですね、僕が見たいので。これからも一緒に相談したり悩んだりできるのを楽しみにしています。

「ぐるヤミ」の周辺④

月曜私塾

講師を務める木方さん

美学・哲学の専門家で、元は現代美術のキュレーターでもあった木方幹人さんによる「月曜私塾」は、ぐるヤミの活動の延長として、ぐるヤミが重視する「集う」場の一つとして、継続的に行われている。「アートとは何か」を中心に、集まった人々の関心ごとや悩み相談、アイデアを語り合うことで、ぐるヤミの新たなプロジェクトが芽生えるきっかけにもなる。

［文：猿田詠子］

私塾は、2010年に熊倉純子先生を介して木方さんと谷中のおかってが知り合い、それ以前に別の学生から木方さんに提案された読書会と合流する形でスタートした。ぐるヤミについて、木方さんは「世に言われている『人々の関係性の中で何ができるか』というある種の新しさが、ぐるヤミにも存在している。本人たちもアーティストで、通常のプロジェクトのような型にはまらない感じも面白い」と評価する。私塾は毎週月曜日、場所を木方邸「谷中の家」に移して、現在まで続いている。

私塾で話される内容は、「アートとは何か、アートは何のためにあるのか」を根底においている。当初は貧困、格差、オタク、モテ／非モテなど若者の問題を、各回のテーマとして設定していたが、やがて、毎回入れ替わる参加者の個人的な話や興味から、その場で話題が発展していく形が自然と出来上がっていったようだ。「勉強だけに留まっていたら面白くないだろうけど、木方さんが現代の若者のいろんなこととつなげてアートについて解説してくれるから超わかりやすい。しかも、絶対自分はアートに興味があるんじゃなくてマネジメントの方だと思っていたことが、『社会的にそれがアートだよ』と言われたり。そのズレが明確になった」とちょり。

社会人が仕事を終えてから来られるよう、開始時間は20時。訪れるのは、ぐるヤミの企画を手伝ってくれた人、木方さんと元々つながりがある人、参加者が連れてきた知人、地域の何かに関わりたくてホームページを見て参加する人など様々。普段は5〜8名ぐらいだが、木方さん宅に宿泊しているアーティストがゲストに交じったりすると、部屋にびっしり15名ぐらいが集まる。

「20代半ばまでの過渡期のようなときに出会う人たちがけっこういます。大学卒業して就職したけど合わなくて、という人たち。でもみな過渡期なので、それぞれの道に向かって、また離れていく人が多いですね」と梨恵子さん。価値観がゆらぎ、何かに迷っているタイミングの人たちが集まって、色々な人と出会い、新しい場所に進んでいく。集まった人々が抱える課題に丁寧にアドバイスする木方さんも、「自分自身も過渡期というか、私塾をゆるく続けながら、もう少しアウトプットしたいという意志はあるけれど、まだやっていないという自覚があるんです。自分でも何がやりたいのかわからないという若者の間にある疑問が、自分にも考えるきっかけを与えてくれる。私にとって、世間や公共の問題を実感する入り口としても存在しています」と語る。

不定期に開催されることが多いおかってのの活動の中で、「毎週」開催されている安心感と、誰でも参加できる敷居の低さから、地元の人がぐるヤミやおかってを知る窓口になったり、あるいはツァー!!など他のプログラムで知り合った人たちが継続した関係を築く場として、「月曜私塾」は機能している。

ある日の私塾のひとコマ

Scene.1　アートとエンタメ

ちょり　（ギャラリーでのアルバイト経験の話より）アートのマネジメントが足りてないんじゃないかと。アートマネジメントは、一般のマネジメントに＋αの能力が必要。専門的な知識がないと、社会と現場の間に立つのは難しいですからね。でもそこにお金を払える人はとても少ない。

木方　それはキュレーターの立場と重なる話ですね。

ちょり　アーティストはギャラリーを借りるお客さんぐらいに思われているけど、普通のお客さんよりずっとややこしいんです。それで、結局そこの枠に入れる、扱いやすいアーティストだけになっていってしまう。キュレーター側も、そうするしかないのかな。

木方　アートはエンターテイメントではないからね。でも、最近の学生の発表を聞いていたら、最初から全部がエンタメだと思っている人もいるようですね。

渡邉　アートってそういうものじゃないの？ってね。実際はすごく地味なのに。

木方　「すべてがサービス業」という時代性ともつながる問題ですね。

ちょり　非営利と割り切りすぎることの問題もあるから、「少しは意識しなさい」と熊倉先生はおっしゃってバランスをとるんですけど、そもそもアートに対しての前提が違うから、その言葉で「ほら、営利的にやらなきゃいけないんじゃん！」となってしまう。

木方　なるほどね。でも営利的なことがしたいなら、もっとふさわしいところがある。音楽でも文学でも、高いクオリティじゃなくて、コミュニケーションツールとして盛り上がれるものが一般化しているという話と似ている。

ちょり　逆にクオリティを気にしているのがちっちゃい、ダサいなんて見られることもある。現時点では、クオリティ重視のこれまでの文化を崩していくから楽しいところはあるのかもしれないけど、その後、どうなるのか。

Scene.2　マネジメントのテクニック

ちょり　私たちは社会のこと、アートのことがわからないまま漠然と「こんな感じじゃない？」と活動してきた。熊倉先生としては「いろいろなプロジェクトを見てきたからできるでしょ」という感じだったみたいですが。

渡邉　でもぜんぜん、運営面はタッチしていなかったから。誰も法人の作り方もわからないし、聞く相手もいなかった。

ちょり　何かを作るときには最初が大事だけど、おかっては熊倉先生ありきで始まったから、マネジメントというものをやらずに育ってしまって。先生が離れたから、ある意味これからが正念場というか、営業力が必要ですね。

木方　営業力的な身体の動きは、表現にもつながる気がする。コミュニケーション力だけじゃなくて、ある種の義理人情、信頼。アートマネジメントって、広い意味での営業ということを、意外と軽視しているんじゃないかな。どうしても公の中にいると、上からお金がおりてくるからね。

ちょり　地元の個人経営の人を見ていると、そのありがたさを感じます。それから、何かこれまでにないものをやろうとすると、運営的リスクがあるからみんなやらないんだと実感します。私たちは毎回懲りないけど。

木方　でも、確実にテクニックは上がっているんじゃない？

ちょり　上がっていますね。みんなの失敗がそれぞれに教本になっていて、だからその仕組みがあるんだとわかる。仕組みを作って、細かく場合分けして、小さいもののクオリティが上がっていったら楽しいなと思って。そういう実験も始めています。

「ぐるヤミ」の周辺⑤

まちのこえ

「ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト」や日頃のお付き合いの中でお世話になっている谷中のご近所の方々。彼らにとって、谷中のおかってとぐるヤミの活動はどのように見えているのか、さまざまな年代や関わり方の異なる人々に、お話をうかがいました。

［凡例：①年齢　②谷中歴　③職業・肩書　④関わった企画　※2014年2月現在］

野田俊行さん

①32歳　②32年　③「谷中のおやつ屋 がようし」オーナーパティシエ　④野点、ぐるぐるミックス、谷中妄想カフェほか

「やりたいことを一緒にどうですか」の課題発見型活動

お世話になっている都議さんからおかってのメンバーを紹介されたのがきっかけです。会ってみたら面白そうだし、すごく緊張しているし（笑）、それで商店街が使えるように協力することにしました。困ったらきっと助けてくれる人はいるけど、助けてくれるだろうと思っていないところがよくて。「大丈夫、大丈夫」って言い続けながら応援しています。ナビゲーターとして参加した「谷中妄想カフェ」では、ひたすら全員笑うまでボケ続けていました。何が本当で何がウソかわからないまま、ふわっとゴールするんです。コントの台本を書いて、他のあるナビゲーターと打ち合わせして一回だけやって、あとはやらないでスルー。相手は「えっ?」となるし、お客さんも「打ち合わせ通りにいってなさそうだぞ」と妄想もはかどる。ぐるヤミは「みんなもどうですか?」という感じで、そこからやることを自分で見つける「課題発見型」。他の団体が役に立つためにやっているのとは違います。やってほしいことが決まっていると面白くないんですよ。地味な右肩上がりでこれからも続けていってほしいですね。

高尾好子さん

※妹の美千子さん（80歳・右）と

①83歳　②83年　③谷中霊園内お茶屋三原屋　④谷中妄想ツアー!!、野点、ぐるぐるミックスほか

「よしこさん」と呼んでくれる子どもの友だち

こういう仕事なので、人が見えるのが好きなんですよ。裏の空き地をもともと使っていらしたのが表具屋さんで、3代前の方（寺内銀次郎）が、岡倉天心先生と日本美術院を一緒に立ち上げたんです。それで美術とは近い感じがありました。「ぐるぐるミックス」のお話がきた時も古くから知っている幼稚園でしたから、いいですよと引き受けました。ミックスでは、子どもさんとお水を撒く道具を作って、その次の回にここに水を撒きに来たんです。おかってのメンバーが、最初に子どもさんを集めて「好子さんです」と紹介してくれたから、子どもさんが「よしこさん、よしこさん」って名前で呼んでくれるんです（笑）。子どもさんは打ち水の経験もないから、最初はご自分にひっかけちゃうようなことが多かったですけど、私が木の根元に撒くようにお手本を見せると、一生懸命真似してくれて。そのあとも、ここを通るお子さんが浴衣姿を見せに来てくれたり、本当にいい思いをさせていただきました。それからも具合がいいと私の方からもうかがって、子どもさんと一緒に遊ばせてもらいましたね。

深川伸さん・深川紀子さん

①67歳・66歳　②18年（伸さん）・42年（紀子さん）　③天王寺町会長　④野点、ぐるぐるミックスほか

ふしぎな個性と一生懸命さで地域にも浸透した

紀子さん　最初はよくわからなくて驚いたけど、みんな地域に溶け込もうと必死だったのよね。お祭りを手伝ってくれたり。

伸さん　お神輿を手伝いたかったんじゃない?

紀子さん　あなたは最初のツアー!!は行かなかったのよね。私は近所の女の子と行きましたけど。

伸さん　恥ずかしいじゃん。でも次のツアー!!では持たされたギロ（楽器）があまりにいい音で、探して取り寄せた。昔から谷中は「藝大ならいいよ」という、藝大には甘い土地柄なんだよ。

紀子さん　だんだん町会のみんなも慣れてくれて。おかっての人たちは、人を嫌な気持ちにさせないのよね。

伸さん　大西はすごく素直で、知らないものは知らないと言える。

紀子さん　幼稚園の子どもたちが素直に話を聞けるのも、健太郎の影響じゃないかな。ミックスで谷中霊園の見どころを案内したあとも、「ありがとうございました」って挨拶に来てくれて。

伸さん　おかってはへこたれない奴らばかりだから、俺はかなわないよ。

カニさん

①25歳　②25年　③漫画家　④ぐるぐるミックス、谷中妄想カフェほか

おかってとの関わりで自分の本心がはっきりした

常連だったカヤバ珈琲で（大西）健太郎さんに声をかけられ、「ぐるぐるミックス」に参加しました。実際には何かを教えるというより、「子どもと戦いに行く」感じでしたね（笑）。震災のあとは、上野の摩利支天で似顔絵を描いて、売上を被災地に寄付しました。自分は、今までは「どうせできない」と煽られてから、「何を!」と行動を起こすパターンが多かったんですけど、おかって周りの人たちは、似顔絵描きを「いいじゃん!」と肯定したのが、僕の中では衝撃でした。それまで自意識むき出しだったのが、自然体で好きに生きていいんだと気づいたというか。ボランティアだからこそ自分も楽しむのが大切なのに、途中で義務感になってしまったところがあります。でもお陰で、本心がはっきりしたかもしれませんね。それは自分自身の状況が不安定だったからで、自尊心を養うには、漫画を描かないといけない、向き合わないといけない状況に追い込まれて、気づいたんです。昨年度まで大学生で、卒業と漫画賞（手塚賞）の受賞が重なり、節目の年になりました。

長谷川知広さん

①30歳　②1年10カ月　③会社員　④ぐるぐるミックスほか

難易度が高いけど外れない、地に足の着いた活動

僕は自分が絵を描くのが苦手だったんですけど、子どもと一緒だと「〇〇描いてー!」と言われるから描けたんです。「ぐるぐるミックス」にスタッフとして参加して創作の敷居が下がりました。遊ぶことがゴールじゃなくて、遊んで創作して、成果物を作ることを、意識的にしているのもいいですね。自分も今は政策提言の仕事が多いけど、ホームレスの人たちの表現や、仲間を作るなどの方面に興味関心が移っています。とくに高齢

で就職などが難しい人もいる。創作にはその年齢でしか出せない味みたいなものがあるので、別のやり方で支援者の役に立つかもしれない。子ども向けの創作教室は他にあっても、地域の人を混ぜることで難易度が上がるので、ミックスはそこを攻めているのもすごくいい。組織規模とか、どれだけ去年より実績を残すかを意識する団体が多いなか、谷中のおかってはすごく人間的で、自分たちのできる範囲はどれぐらいか、やりたいことと外れてしまわないか、そういう瀬戸際で仕事をしている。すごく地に足が着いた活動だと思っています。

沖原広明さん

①36歳　②7年（上野桜木）　③化学メーカー勤務　④どーぞじんのいえほか

自由になるハードルを下げてくれた

イベントがきっかけというよりは、カヤバ珈琲でアルバイトをしていたちょりさんと出会って、つながりが続いたという感じです。友だちがやっているからという感じでイベントにも顔を出してみたら、色々な生き方があると気付かされました。自分を振り返ると、効率よく生きようとしていたのが嫌になって、大学を辞めて自衛隊に入った時期もあります。それまで我慢してた分、極端に振れちゃうんだよね（笑）。好奇心は旺盛だけどビビリだから、たいしたことがないハードルでも高く見えて、どうしようもなくなると棒高跳びしてしまう感じ。みんなと出会ったのは、自衛隊も辞めて大学に再入学して、漫然と就職し、漫然と暮らしていた時期です。おかっても含めたみんなを見て、自由に生きていいと、いろいろなハードルが下がったと思う。こんなんじゃいかんなと。35歳になったとき、人生でやり残したことを考えてモトクロスにはまったんですけど、昔の俺だったらしなかったことなんだよね。みんなにお礼を言わないといけないね。今はあまり我慢しないで好き勝手やっています。

BARBARA DARLINgさん

①32歳　②0年（向島在住）　③アーティスト　④谷中妄想ツァー!!、どーぞじんのいえほか

世界的なアートの潮流に、正しく乗っている

僕は藝大の油画科出身で、大西と富塚は大学のゼミで一緒になり、「フラワーズ」という団体を結成していました。僕個人のプロジェクトでは、アーティストに現実的な困難を与えることに興味があったから、最初は彼らが谷中でアートプロジェクトをやる意味がわからなかったですね。谷根千はアートが受け入れられるのは当たり前の地域で、そのかわり谷中の文脈に集約されてしまうから。ただ、富塚はアーティストの側、アーティストを活躍させる場に向かっているのだと思います。それはアウトサイダー・アートが評価されたりパーソナリティに向かう世界的なアートの流れに正しく則っている感じはします。僕は大学で仕事もしているし、他のプロジェクトにも関わるけど、世界的なアートの流れを意識している人って実はほとんどいない。富塚は、「私はあなたをこう解釈した、これやりたいんでしょ?」という感じで話すから「そうっすか」みたいに参加できる。僕はアートの土壌に演劇的な文脈やコミュニティを持ち込みたいので、芸人という感じで扱われるのが、すごくやりやすいです。

「ぐるヤミ」の中心

「ぐるヤミ」の歩みとこれから

「ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト」を運営するコアメンバー、谷中妄想ツァー!!からどーぞじんのいえまで、メインの企画を生み出したプロジェクトディレクターの富塚絵美（ちょり）と、芸術っ子のパフォーマーとして参加し、現在ぐるぐるミックスのメインファシリテーターを務める大西健太郎、そして地域の人々の窓口となり、谷中のおかって代表を務める渡邉梨恵子。3人それぞれに、ぐるヤミのこれまでの歩みと今後の展望を聞いた。

［聞き手：小林英治、猿田詠子］　2014年2月27日（木）谷中にて

アートの土台になる「文化」ごとつくり出したい

富塚絵美（ちょり）
プロジェクトディレクター

さまざまな種類の人が共存できる空間

――今回ぐるヤミの活動を1冊にまとめるにあたって、改めてこの3年間を振り返ってみてどうですか?

ちょり　とにかく芸術の環境を創造したいということに必死でした。想像していたことですけど、やはり時間がかかるのと、今見えてきている問題は、リアルにお金が必要ということ。「文化とお金の問題」についてはより深さを持って実感しつつ、面白い問題として外せない柱だなと思っています。最近やっと身をもって、こんなにややこしかったんだと（笑）。単純に、今アート界にないような魔術的なものがもっと見たいなとか、もっと魅力的なものが社会にあったら楽しいのになというぐらいで始めたつもりなんですが、今ないものをちょっと追加するだけでも、すごく大変なことなんだなと。しかも新しさも含めて、色々なことが考えられる環境を作るなんて、相当な知恵がないと実現できない。だから、お金のやりくりも含めて、その知恵を鍛えていきたいという気持ちと、これまでの活動をなかったことにしない技術を高めていきたいですね。

――ぐるヤミの唯一のルールとして「集まって、解散して、また集まる」と掲げていますが、本当にたくさんの人が出入りしています。

ちょり　物事の最初の純粋な時期ってあるじゃないですか。そのまだ何も起こっていないときに集まってくるメンバーと、何かが起き始めたときにそれにつられて集まってくるメンバー、そして形になり始めたときに集まってくるメンバーとで、全然種類が違うから、その人たちを共存させることが一番難しいですね。始まりのときのみんなが見ていた夢と、始めたときに夢を抱いて来た人と、それが続くとなったときに使命感を持ち始める人とか、そういう

色々な種類の人が一緒にいられる空間はどういう場だったら成立するんだろうと、日々模索しています。

——言うのは簡単だけど、実際はすごく面倒くさいことですよね。それぞれの目的が違うから揉めごとも起きるだろうし。

ちょり　でもそういう異なった人たちが一緒にいたほうが、作品にとっても、表現行為を守る環境にとってもいいと思うんです。作り出す人、ファンになる人、そこで使命感を帯びる人、色々な人が一緒にいるという環境を実現したいんだけど、その人たちを惹きつけたままどうにかみんなが一緒にいられる企画を実現しようとすることだけで、この3年間は必死でした。でも、その仕組みができて、それぞれみんなの「関わりしろ」ができたら、その仕組み自体が「芸術の環境」と自分が言ってきたものになっていくのかなというのが、最近見えてきています。この本を契機に、アーカイブの重要性と面白味をすごく感じていて、これを読んで妄想を抱いてきた人だったり、今まで出会わなかった種類の人たちと、より魅力的なアーカイブについて考えていきたいです。

自分のリアリティに誇りを持つこと

——「芸術の環境」をつくり出すということは、アートをまちに根付かせるというのと違いますか。

ちょり　今、アートと呼ばれているものって、文化があって、それが蓄積されて極まっていた技術や上澄みだけを呼んでいるものだと思うんです。それはやっぱり文化の裾野があってのもので、いきなり上澄みだけは作れないと思っていて、そういう意味で、いきなり上澄みだけやろうとした「アート」には興味がなくて、本物感が足りないというか、そんな小器用にやれるレベルじゃちょっとなという不満があります。だったら、その土台となる「文化」を始めちゃった方がいいんじゃないかと。それには、まずその土地や人が持っている資源を掘り起こさないといけないと思って、ぬか床のような「はっち」から始めたんです。資源から生み出せば、そのオリジナリティは奪われづらいと思って。ちょっと大げさかもしれないですけど、縄文文化、弥生文化……、そういう延長線上に「ぐるヤミ文化」があるという意識でやっています。

——単なる作品を作っているわけじゃないと。

ちょり　新たなアートが生まれる文化を作りたいんです。その土地で、そこに集う人がいて、いま必要としている……、だから暇な人だけが集まっているかもしれないし、いまの社会がつまらないなとか、行き場がないと思っている人が集まっているかもしれないけど、でもそれでいいし、そういう人たちが新しいものを作っていけばいいと思っています。いまの社会で満足していたり、場がある人はそっちで頑張ればいいし、そうじゃない人たちが、今の社会がダメだとかいって批判するよりも、自分のリアリティを信じて誇りを持って生き延びることの方が大事。私自身、自分が実感がない世界で生きることを簡単に受け入れることに抵抗があるんですよね。そういう実感がある場所で生きることを諦めないで、どうにか社会と一緒に、でも自分も殺さずに生きていく方法を生み出せる場というのは、多分どの時代でも必要になると思います。

——現状のアートはまだその力が足りない？

ちょり　あまりにその場が開かれていないというか、まだアートの使い方がわかっていないと思うんです。みんなが有効的にアートやアートマネジメントという発明を使えるような世の中にしていきたいという思いが強い。といっても、自分たちもどうしたらいいのかまったくわからなくて、闇雲に突っ込んでいくようにぐるヤミを始めました。知識よりも自分の身体を信じて、できる範囲でやっていくということを一生続けていくということしか決まっていなくて、次の展開として何をしたらいいのかまだ明確にはわからないんですけどね。

一番重要なのは一番地味な作業

——今回地域の人を含めていろいろな方に話をうかがいましたが、関わった人たちから一定の評価は得ているように感じました。

ちょり　まちの人たちが、本当に柔軟に楽しんでくれるので、本当に嬉しいし、有り難いです。ぐるヤミって駄目を出したらきりがないようなつくりになっていて、突っ込みどころも満載だから、どの企画も実現できた奇跡に感動しています。「表現」というのは表現された痕をみて何が表現したかったかを知る仕組みになっているように思います。やっている本人も、やってみた後にしかわからないというのが、「表現」に「責任」がついてきたときのジレンマですね。でも、どの企画も沢山の人の力を借りただけあって、有り難いことによく出来ています。「はっち」から始めて、まずは資源をみんなで掘り起こして、その資源を使ってこの土地に合った文化や習慣の可能性を開発したら、「ツアー!!」や「カフェ」、「ミックス」という形が出来ました。でも、形となったイベントのために集まっているというよりは、その過程でゴタゴタとやっていくなかで出来てきた関係や、そうやってゴタゴタやること自体に意義ありという部分も。なので、「どーぞじんのいえ」は「はっち」からの3年間のまとめ的な作品で、少しずつ関係が深まっていった人々が一同に集い、ぐるヤミならではの空気感をつくり出していたと思います。理想型としては、どこかで新しい文化をつくりたい人がいたら、「はっちから始めてどーぞじんまでやれば、その過程でその土地ならではの文化が創れます」みたいな仕組みを作りたかったんです。実際ちょっとずつそんなものになっているような気もしてるし。

——はっちには時間をかけてますよね。それをちゃんと継続しているのが、開花したというか。

ちょり　一見何もしていないように見えてしまうんですが、一番地味な「はっち」が実は一番重要なんです。そこでその土地に合った酵母ができて、その酵母さえ使えば新しい料理のバリエーションはいくらでもできると思っています。ゆるくやることで、その土地の空気を吸った空気感みたいなものをみんなが作りだして、なおかつそれを自覚するまでに、たいして意味のなさそうな集いが何年間か必要で、そこからみんながそれを自分たちの誇りに変えて、「ちょっくらみんなのために一肌脱ぐか！」ってなったときには、多分それはもう地域以上の力になっている。

——ぐるヤミの活動に、最近よく言われる「コミュニティデザイン」という意識はありますか？

ちょり　似てるけど、かなり違うと思うんです。きっと谷中で「谷中住民の方、募集！」と言っても、誰も来ないんです。「○○をするので来てください！」もダメ。でも、「はっち」でぼーっとしてると、人がどんどん来る！（笑）近くに大学もあるので学生もうろうろ、散歩客もうろうろしていて、「まちの人ではないという意識の谷中のひと」が谷中にはとっても多いんです。谷中でなにか面白いことをしたいという人が沢山いるというのが、きっと昔からずっと続いている谷中の魅力であり、新しい文化を生みだす底力なんだと思います。今後は、これまでの仕組みづくりの精度を上げて、もっと自覚的に活動できたらいいなと思っています。

他者との協働の中に生きること

大西健太郎
ぐるぐるミックス メインファシリテーター

普段にはない出会いを生む場をつくる

――大西くんはもともとパフォーマーであり、“芸術っ子”のひとりでした。おかってが設立された頃は何をしていましたか?

大西　僕はまだ学生でした。最初の谷中妄想ツァー!!ではパフォーマーとして参加しましたが、2つ経緯があります。一つは、自分自身も谷中に住んでいて、個人的にも谷中界隈を生かした活動をしていきたいと思っていた時期だったこと。僕自身は美術学部の先端芸術表現科出身なので、もともとちょりと友だちで、熊倉先生とはおかってに出会ってから知り合いました。それで、妄想ツァー!!をやるというのは、構想段階からちょりに聞いていて興味を持ちました。自分がやろうとしていた活動とも、つながりをもてそうだと。その後、じんじんさんと共同でぐるぐるミックスをやろうというときに、正式におかってに入りました。

――それはツァー!!に実際に参加してみて得たものがあったからでしょうか。それともじんじんさんに出会っていなければ今のようになっていなかった?

大西　両方ともありますね。ツァー!!をやったことによって、個人の力ではできないものができたという手応えがありました。それは圧倒的に面白かった。それから、じんじんさんに出会う前に、個人史的に言えば、オランダの暮らしのスタイルや人の自由さ、人々の生活の根幹にある大事にしているものなどに魅力を感じて、オランダに留学しようとしていたんです。それまで何にも勉強してないのに、無謀にもプロダクトデザインを専門にする大学に入って、向こうで就職できたらと思っていたんです。でも向こうで自己紹介するときも、個人のパフォーマンスの資料を見せに行って、「これはデザインなんですけど」という、すごく一方的な読み込み方をして行ったんです。その場で「来ない方がいいよ」と言われましたね(笑)。それで、ちょっとハッとして、日本に帰ってきたときに、ぐるぐるミックスの話を聞いて、それが何か自分の中で結びついたんです。それまでオランダという環境を、ある意味すごく勝手に自分の中で読み込んでいたんですけど、本質的には場所とか環境というよりも、その仕組みにすごく影響されていたんですね。ミックスでやろうとしていることを聞いて、オランダでやろうとしていたことは、オランダでやる必要はないんじゃないかと。むしろ、仕組みを自分で創りだした方が面白いだろうと思ったんです。

――具体的にはどんな仕組みですか?

大西　ミックスが、地域の大人と子どもとスタッフの人たちの誰にとっても、普段にはないような出会いが生まれる場になるんじゃないかなと思ったんですね。普段は見られないような子どもの反応や、大人にとっても改めて子どもに接した時のインパクトのようなものが生まれるだろうという期待があって、一つのプログラムの中で繰り広げられるための状況を目指そうと思いました。それとは別に、子どもという存在にも興味を持ったんです。それはパフォーマーとしての関心というか、まず、当たり前ですけど子どもの背が小さいということ、自分と見えるものがどれぐらい違うのか、身体の使い方とかキャッチする力はどこに備わってくるんだろうということに興味がありました。

じんじんさんに見た コミュニケーション力

――大勢の子どもを預かることに不安はなかったですか?

大西　不安はもちろんありました。最初のうちはじんじんさんがひと月に1回立ち会ってくれるということがあったので、やっぱりおかってとしても、親御さんからも、じんじんさんがいるからという安心感と、地元の幼稚園でやるからという信頼感がベースにあるということは自覚していました。だから、場面場面で、じんじんさんがどう振舞っているかは、できるだけ見ようと思っていました。

――具体的にどういうことを受け取りましたか。

大西　まずは、すごく丁寧にしゃべるということなんですね。こっちがわかっているということを、相手(子ども)がどれぐらいこちらの意図していることに結び付けられるか、1つのことを伝えるのに、3つ4つぐらいの説明を、順序を追って話すので、すごく言葉数が多いし、その都度言葉をかける対象の人に、ものすごい表情を使う。だから、大きなくくりでいうとコミュニケーションの部分が大きいですね。それは子どもに対してだけでなく、スタッフの人たちと遊びを共有するときの手段、ミーティングの持ち方にも学ぶところが大きかったです。ミックスだけではなく、野点の現場でも、じんじんさんはその地域の現場のスタッフと必ずミーティングの場を作るんですけど、プログラムの内容とか狙いとかが共有できる、すごく詳細なレジュメを作成するんです。それをなんとか真似ようと思って、同じ体裁と言葉の遣い方、黒丸で強調している部分とか、鍵括弧でくくる意味とかまで、なるべく真似して、そういう言葉を現場でじんじんさんがどういうふうに伝えているのかというニュアンスを汲み取るようにしていました。

人の関わりを通じて 過去・現在・未来も“ミックス”する

――ぐるぐるミックスは地元の幼稚園との協働プロジェクトでもあります。

大西　初音幼稚園の高橋先生には、毎回とても丁寧に打ち合わせにつきあっていただいていて、高橋先生の存在もミックスにとって大きいです。物事が変化していくスパンの捉え方がすごく大きくて、子どもたちがあと10年、20年したら……という話がいつもあって、常に先に立っていてくれるように見えるので、すごく支えられています。そういう大きいビジョンのある大人の人たちが周りにいて、そこに立ち会えているということも、僕がこれまで続けられているエネルギーになっています。

――それは教育という問題にも関係してきますが、よくある、「子どもの情操教育にアート」をというのとはちょっと違いますね。

大西　それはぐるヤミのプロジェクト全体に言える、独特の良い所だと思っています。ミックスは現在、1年間という期間を設けて取り組んでいますが、子どもたちが活動を卒業してから、何年か後にまた関わり続けられる仕組みを目指したいなとも思っています。これは先日高橋先生とも話したんですが、積極的で意識の高い親御さんが増えてきたという印象がありま

す。口コミもあって、3年目になって、ミックスというものに対するある意味の期待とか興味を持って来てくださる方が増えているのを感じます。来年度のガイダンスをしたときに、そういう面持ちでやってくる親御さんが多くなっているんです。それは、活動を続けていく上でとても重要です。親御さんや地域の中から、関心や興味が芽生えてくることが活動の支えになり、やがて、続いていく根拠になっていくと思います。それと同じレベルで、今の子どもたちが大きくなったときに、何らかのリアクションが返ってくるということをすごく期待しています。この子たちの中から、将来のミックスの状況を作る素地になってくれる存在が出てくれたら素晴らしいと思うんですけどね。そんなことも、しばらく継続していくなかで見つめていきたいと思っています。

常に資源の掘り起こしを

――ぐるヤミの中でもミックスは地域の資源と需要を掘り起こしたわかりやすい形の成功例になりました。

大西　自分たちも「掘り起こす」という言葉をよく使うんですけど、それがどういうことかなと改めて考えています。他者との協働の中で、まちや人の魅力に衝突することかなと思うんです。企画で場所を探す時でも、ゲストの方にお願いする時でも、まず、「あ！ いいな」という魅力的な予感があります。それで、お願いに行ったり、交渉をしたりする中で、必ず上手くいかないことが発生します。それは、一見、似た様な経験や価値観を持っていそうな相手でも、相手のことをもう一度自分の中で噛み砕こうとした時に、何かひっかかって上手くいかないということ。自分の中での理解や解釈の枠に当てはまらないことが、相手にあることに気付くんです。はじめに感じた「あ！ いいな」という予感は、おそらく、その枠の向こう側にあるように思います。もちろん、枠の向こう側への行き方なんてないし、踏み込もうものなら、相手にだってある種のストレスを与えるでしょう。でも、そこからが真剣勝負。使えるものは、何でも使ってみる。なす術がなくなればその場で考えるしかありません。一体何が「魅力的」なのかを精一杯伝えようとする。そうすることで、お互いにとって今まで知らなかった出来事に出会えるし、その時には新しい関係性が生まれているんです。

――個人的なパフォーマーとしての活動もミックスにとって重要ですか？

大西　それは切り離せないと思っています。そういう個人的な、他人から見て何をやっているかよくわからない時間を生きていることがないと、多分ミックスでの立場も成立しないと思います。遊びを考えるうえでも、新しいことをするうえでもそう思いますね。それは自分に課していることでもあって、逆にいえば、それがないとミックスをやる根拠にならないんです。

――改めてこの3年間のぐるヤミを振り返ると。

大西　既存の社会的な価値基準やルーティンの中での仕事だったり、日常ではなくて、あえて自分たちから何かを生み出すための場とか人間関係を作る模索期間だったと思います。実はそれってものすごく労力がかかる大変なことで、まだまだ足りないと思うこともたくさんあります。それに、一度立ち上げた仕組みであっても、それが日常の中でどのように変容していくのかを見つめていきたいとも思います。一過性の出来事にとどまらずに、既存の社会や習慣の中にとけ込んでいって、プロジェクトに関わる人や場所、派生した物事の動きの中に生きるエネルギーを絶やさず培っていきたい。これからも丁寧にプロジェクトをやっていきたいですね。

続けていけるかどうかも含めて、続けていくこと

渡邉梨恵子
一般社団法人 谷中のおかって　代表

話を聞くことが一番の仕事

――渡邉さんがちょりさんと知り合ったのはと大学を出てからということですが。

渡邉　谷中のおかっての田尻さんに誘われたのがきっかけです。もともとは学生のときに取手のアートプロジェクトをやっていて、そこで田尻さんと熊倉先生と知り合って、ちょりとは谷中からですね。大学を卒業した2008年頃です。大学では建築学科だったんですけど、卒業後は2年間、おかっての活動と並行して印刷会社で働いていて、はっちができる直前に会社を辞めて、本格的に参加しました。おかってでやろうとしていること自体もすごく時間がかかることだなと初めから思っていたので、仕事をしながらその傍らでできることでもないだろうと。

――おかっての中では、アーティストのちょりさんと大西くんとはちょっと違う立場ですね。

渡邉　私が何者かということは、その状況の必要に応じて設定されるところがあって、本当に具体的な役割で言うと、おかっての代表だったり、ぐるヤミの事務局長でもあります。おかっての中の役割としては、企画にもよりますけど、ディレクション的なところはちょりが主に担当していて、私は事務方というか、まちの人との接点に立っているという感じですね。おかっての人と地域の人や来訪者との窓口だったりとか、大西くんやちょりから今考えていることやそれぞれのプロジェクトのことを聞いたり、学生とは世間話もしつつインターンとして来ているので、教える立場でもあります。

――ぐるヤミ以前に他のアートプロジェクトにも関わっていた渡邉さんから見て、おかっての活動の面白さ、おかってでしかできないことは何だと思いますか。

渡邉　一つ一つの出会いに対して、そこに重きをちゃんと置くという空気感ですかね。それはもちろん、じんじんさんやちょり、大西くんからの影響も大きいとおもいます。かつそれは谷中で活動をはじめた当時、アートプロジェクトに対して感じていた違和感、もうちょっと「こうあったらいいのに」という部分が、おかってで実現できそうな気がしました。アートプロジェクトに参加したり、観に行ったりするなかで、多くのプロジェクトが、招聘アーティストがいて、その作品をどう街中に着地させるかというのがメインで、もちろんそのことがもたらす良い面もたくさんあると思うんですけど、その出来事を通じて土地に還っていくものがどれだけあるかということには、少し疑問を抱いている部分もありました。どの現場も、まちの人に出会って話す機会は必ずあるんですけど、時間の見方、捉え方が、やっぱり「会期」というスパンでの出会いだったりするので、もう少し「何年先」みたいなことも踏まえた時間軸で捉えることは、おかってを始めて、拠点を持つまでできなかった考え方だと思います。

――地域の人ととても良い関係を築いている

ように見えます。

渡邉　拠点を持ち始めた当初は、私たちが何者なのか、何をしている団体なのか分かりづらいということもあって、まちの方に不審がられたこともありますが、自分の中で、それ自体もコミュニケーションの機会として捉えるぐらいの気持ちでないと、拠点を構えて居続けるということはできないかなと、続けているうちに思うようになりました。企画によっては苦情がきたこともありますが、まずは会って、話を聞いて、それをとにかく繰り返すようにしています。話せる機会自体があれば、少なからずお互いの情報を交換できるので、その人がどういう人でどういうことを良いと思っているのか分かるし、それに対して自己紹介もできるし。何者かを説明するそのややこしさを含めて、会いに行ったら、普通に2時間ぐらい話していますね。私自身、そういうのが嫌いじゃないというのはあると思います。話を聞くというのが一番の仕事なのかな（笑）。

先人が残した意思を現代につなぐために

――渡邉さんから見て、ちょりさんと大西くんはどう見えていますか。

渡邉　出会ったときから、魅力のある2人だと思いました。一緒に活動するなかで、それぞれの価値観に触れ、自分にとって新鮮な部分と共感できる部分とがあって、一緒に出来事を作っていけたら面白いだろうなと思いました。アーティスト個人としての表現にも魅力があると思いますが、企画などを一緒に作るときというのはまた違う面白さがあります。ちょりの集まった人全員を主役にして活かすようなディレクションの方法は、新鮮でもあり、そこが個人的な価値観とも合ったのだと思います。

――渡邉さん自身にとってのぐるヤミとは何でしょうか。

渡邉　個人的には、自分自身がリアリティをもって生きていける環境を東京に作るというモチベーションもあったと思います。山梨から出てきて、大学時代から東京に住み始めたので、環境も違うし、まずは自分がより生きている感じがする状況をつくらなければ、拠点を構えて他の人のリアリティにも深く触れるような活動にはならないのではないかと思いました。たぶん、じんじんさんがよく言っている「摩擦係数」につながる話ですけど、さまざまな関係性の間に起こるごたごたやストレス自体も必要で、それも含めて環境をつくっていくということだと思います。じんじんさんとは、話をしたり一緒にプロジェクトを行なうなかで、「そうだよな」と気付かされる点や共感する部分がたくさんありました。

――最後に今後の活動と展望を聞かせてください。

渡邉　続けていけるかどうかということも含めて、続けていく、ということだと思います。規模を大きくするというイメージはあまりないですが、人のつながりみたいなものは、また増えていったらいいなと思っています。大きい話になりますけど、谷中でやっているということも含めて、日本という環境に必要な文化や芸術の文脈の結節点みたいなところを自分たちなりに繋いでいけたらと思っています。ただ西洋から輸入してきた文化だけじゃなくて、目に見えないからこそ、（平櫛）田中さんをはじめ他にもたくさん活動してきた人たちが、少しずつ本当に残したかったものがあると思うんですけど、その意志みたいなものを感じながら、自分たちやこれから生きていく人たちに生かせるような仕組みを作ること。それが、おかっての活動をする中で、ちょっとでも残せたらいいですね。